

輸出繊維会館

設計：村野・森建築事務所（村野藤吾）＋大阪建築事務所
 施工：戸田組

（1961年3月号）

笠原一人

京都工芸繊維大学助教

竣工：1960年
 建築主：株式会社輸出繊維会館
 住所：大阪市中央区備後町3丁目4-9
 敷地面積：1,750.64㎡
 建築面積：1,368.69㎡
 延床面積：15,165.95㎡
 構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
 規模：地下3階、地上8階、塔屋4階
 高さ：軒高31m、塔屋41m
 工期：1960年4月～同年11月

はじめに

大阪は明治期以降、紡績業を中心とする近代産業都市として栄え、「東洋のマンチェスター」と呼ばれるほどに発展した。中でも船場地区の備後町通付近には、今も数々の繊維関係の企業や組織が軒を連ね、大阪が紡績業の中心であった名残をとどめている。日本毛織やシキボウなどが本社を構え、繊維関係の協会や組合の事務所もある。また繊維関係企業の倶楽部建築として建設され国の重要文化財となっている綿業会館（1931年竣工／渡辺節設計）、元は森田紡績株式会社大阪営業所として建設された森田ビルディング（1962年竣工／村野藤吾設計）も備後町通沿いに建つ。

これらの繊維関係の企業や組織に近接し、同じ備後町通沿いに建っているのが、今回取り上げる輸出繊維会館である。近年では、大阪の近現代建築一斉一般公開事業、「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」（OPEN HOUSE OSAKA）で公開されていることもあって、広く知られるようになってきた^{（註1）}。ここでは、輸出繊維会館の建設の経緯や建物の特徴を論じることで、その魅力に迫ってみたい。

輸出繊維会館の建設まで

日本では第2次世界大戦後の復興の中、1949年になると民間輸出が、翌1950年には民間輸入が再開され、朝鮮戦争の特需も後押しして、繊維産業は再び活況を呈することになる。そんな中、1952年に輸出取引法（現・輸出入取引法）が制定され、これに基づいて綿糸布、絹化繊、毛麻、繊維製品、繊維屑の繊維産業の5分野で輸出組合が相次いで設立された。これらは規約や業者間協定を制定し輸出調整事業を行ったが、次第に各団体の事務機構が拡大し、執務スペースが不足するという事態が生じる。

そこで各団体の事務所を1箇所に集約し、関係の業者や団体、官庁との連絡の緊密化、効率化を図るため、輸出繊維業界の共同施設を新築する構想が生じる。1958年2月に輸出繊維会館設立发起人総会が開催され、同年3月には綿糸布、絹化繊、毛麻、繊維製品、繊維屑の5輸出組合の理事長や専務ら9人を発起人、株式会社トーメンの社長であった鈴木重光氏を社長とする株式会社輸出繊維会館が発足した。

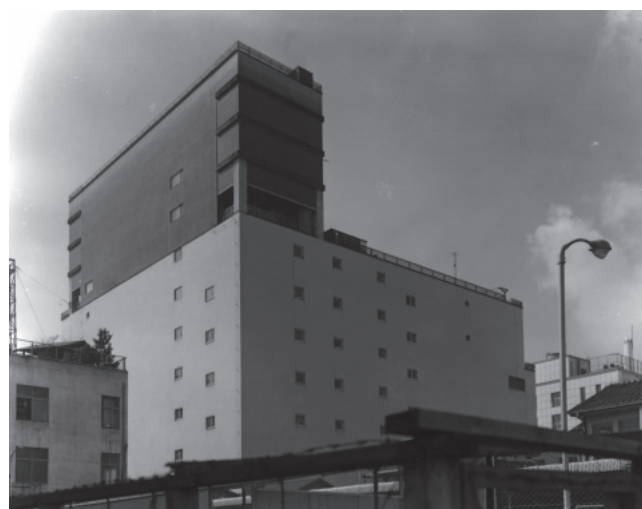
ほぼ同時に、同会社の拠点となる施設として、輸出繊維会館の建設計画が立てられた。1958年3月には当時ブリヂストンタイヤが所有していた土地を購入し、同年4月の取締役会で鈴木社長を委員長とする建設委員会が設立された。この委員会で、村野・森建築事務所（村野藤吾）および大阪建築事務所に設計を依頼することが決定する。公には2事務所による共同設計の形をとっているが、実際には「設計及びデザインは主として建築家村野藤吾先生」であったという^{（註2）}。以後、数か月にわたって、数次にわたる設計が検討された。1959年4月には工事を発注し、同事務所が工事監理を担当して建設工事に着手。1960年11月、念願の竣工を迎えた。

建物は、2階から8階まで事務室を収め、1階天井までの高さを持つ中地階に大ホール、前室、会議室、ロビーなどが並ぶ。地下1階には特別食堂、職員食堂、厨房、自動車車庫。地下2階には厨房、機械室、電気室、金庫、書庫などを収める。そして最上階の塔屋には、エレベーター機械室、空調室、クーリングタワーが備わっている。

建設の際、地下14mの硬い地層の上にベタ基礎を置いて建てられており、建物の柱や梁を細くするため、鉄骨は強度のある高張力鋼を用いて溶接で組み立てられた。高張力鋼を本格的に使ったオフィスビルとしては日本で



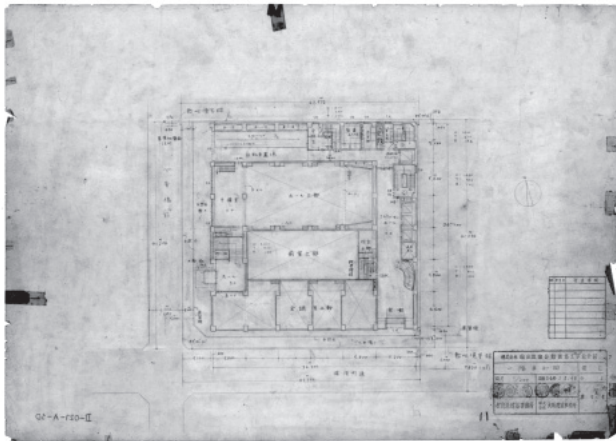
①南西から見る（現状／筆者撮影）



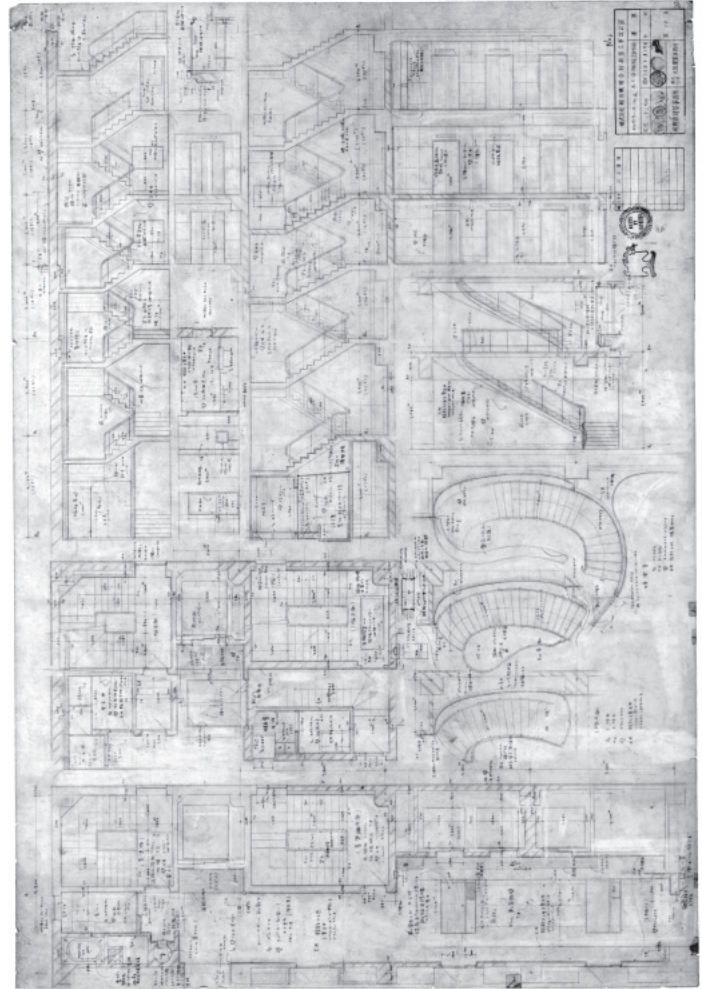
②北東から見る（竣工当時／撮影：多比良敏雄）



③屋上塔屋（竣工当時／撮影：多比良敏雄）



④1階平面図



⑤エレベーターホール及びACD階段詳細図

※④、⑤は京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵（④：II-021-A-10 ⑤：II-021-A-40）

初めてのものだという（註3）。また4階以上に軽量コンクリートを用いている。竣工後、1962年には建築業協会（BCS）賞を受賞、また第3回優良建築賞を受賞している。1990年から92年にかけて、電気設備や給排水衛生設備を中心に改修されたが、現在も竣工当時の姿をよく保っている。

『建築と社会』1961年3月号には、こうした建物の性能に関する説明が載っているだけで、デザインの意図や特徴の説明はほとんどない。したがって建物の特徴や魅力を伝えるには、我々鑑賞者が細部にまで目を凝らし、建物そのものから読み取るしかない。以下、この建物の特徴や魅力を可能な限り読み取ってみたい。

■南東玄関から屋上まで

まずは外観から始めよう。建物の南西角にある交差点から眺めたつもりで論じてみたい〔図①〕。南側と西側の外壁は全面的にイタリア産の白っぽいトラバーチンで覆われており、装飾やオーダーはなく、抽象化された「箱」のような印象を与える。壁面には大きな横長

の窓が配されているのだが、窓と壁の面を合わせているため壁の厚みが感じられず、したがって軽い「箱」のように見える。また窓は、防熱性と防音性に優れたドイツ製の緑色があったガラスが用いられ、しかもアルミサッシの四隅を丸めているため、船の窓のような印象を受ける。これらから読み取れるのは、この建物が優れたモダニズムの方法でデザインされていることだ。

一方で建物はトラバーチン、すなわち石で覆われている。これはヨーロッパの伝統的な様式建築の方法である。また窓は、横長ではあるが、モダニズムに特有の全面ガラス張りでも横長連続窓でもない。そして左右に3分割されており、村野が好んだベイ・ウィンドウやシカゴ・ウィンドウなど、様式建築の窓を想起させる。しかも建物の屋上にはパーゴラが巡らされて冠のように建物を飾っており、1階は壁面で覆われて窓がないため、建物が基壇の上に建っているように見える。外観全体が様式建築特有の三層構成を備えているように見えるのである。

つまりこの建物の外観は、モダニズムの方法に基づきながら、同時にそれが否定した様式建築の秩序にも基づいているという、両義的なものとなっているのだ。トラバーチンにアルミサッシという組み合わせも、古さと新しさの両者を感じる不思議なものである。こうした両義性は村野に特有のものであり、外観だけでも村野らしさが存分に発揮されていると言える。

建物南東にある玄関から内部に入ってみよう。そこは外観とはまるで異なる雰囲気となっている。玄関ホールは2階まで吹き抜けであるが、床は外壁と同じトラバーチン貼りであるが、東西の壁は日本画家の堂本印象の原画に基づく巨大なガラスモザイクの壁画で埋められている〔図⑥〕。極彩色による濃密で多彩な作品である。絵柄を見ると、魚が泳ぎ海藻が揺れているようにも見える。推測に過ぎないが、「輸出」にちなんで豊富な海底の様子を描いたのではないかと推測される。

京都府立堂本印象美術館には、この壁画の原画が残されている〔図⑦〕（註4）。淡い色使



⑥ 玄関ホールの東西の壁は堂本印象画伯の原画に基づくガラスモザイクの壁画で埋められている



⑦ 壁画の基になった原画（京都府立堂本印象美術館所蔵）

⑥、⑧～⑬
の写真は
筆者撮影



⑧ ぐにやりと曲がった手摺が特徴的な地下への階段



⑨ 2本の避雷針がかわいらしい塔屋の現状



⑩ 傘の様な屋根を載せたデザインの西側玄関ポーチ



⑪ 村野がデザインした椅子やテーブルが並ぶロビー



⑫ 堂本画伯原画のタペストリーが飾られたホール前室



⑬ ベニヤ板の壁面の中にシャンデリアが吊り下げられた大会議室

いだがカラフルなもので、その筆致からは短時間で描いたことが想像される。自在で軽快なタッチは魅力的だが、これを元に密度の高いガラスモザイク壁画として完成させた関係者の技術にも驚かされる。スケッチのそばに「壁面モザイク」、「岩城ガラス製」と書かれているが、タイトルはなく、やはり何が描かれた壁画であるのかは不明である。

この玄関ホールには、湾曲した壁沿いに、中地階を経て地下1階まで到達する階段がある〔図⑧〕。ここでは湾曲した階段のデザインもさることながら、手摺が見どころである。細いステンレス製の支柱の上に木製の手摺が載っていて、その断面は、指で持ち易いように三日月型になっている。さらに階段の登り口付近で、端部が階段の外側に向けてぐにやりと曲げられ、利用者の服や手が引っかからないようなデザインとなっている。細部まで気を配った、実に優美な階段である。

手摺は、ドアノブと並んで、建物の中でほとんど唯一、人間が直接触る部位である。手摺

やドアノブを魅力的にすることは、建物を利用する人々に対して、建物への親しみを高めることになる。玄関ホールの壁画と並んで、大衆や民衆に受け入れられる建築を目指した村野の特徴がよく表れていると言える〔註5〕。

今度は玄関ホールの奥にあるエレベーターに乗って、屋上へ行ってみよう。屋上はガランとした広場のようだが、その周囲には鉄製の柵とパーゴラが巡らされている。この柵とパーゴラは、道路からも見えるが、近づいて見るとパーゴラはY字型の支柱に湾曲した天井面に格子が並んでおり、ル・コルビュジェ風のデザインであることが分かる。

4階分ある大きな塔屋も目立つ〔図⑨〕。この中には、エレベーターの機械室や給水塔、また現在は閉鎖されているが茶室もある。塔屋の最上部に鉄を網のように編んだ2本の避雷針が建っているのがかわいらしい。また塔屋の壁面は、現在は白い金属パネルで覆われているが、竣工当時は異なる〔図②③〕。写真を見ると、壁面が黒っぽいタイルに覆われ、

上部だけ、白か銀と思われる色のタイルでグラデーションが作られている。艶めかしささえ感じるものだが、建物が白いのに塔屋だけ黒いというのも面白い。未確認であるが、現在の金属パネルの下には、ガラスモザイクが残されているかもしれない。

管理人以外に訪れる人がいない塔屋で、これほど凝ったものはなかなかない。これは、着物の裏地や下着に凝る、という感覚に近いのではないかと。村野は、階段は段裏こそが大事だと語っていたが〔註6〕、目に見えにくい場所こそ丁寧にデザインしようとする村野の態度が読み取れる。

同様のデザインが他にもあるので簡単に触れておこう。建物の北西角には、道路から地下駐車場に降りるスロープがある。ピンコロ石が敷き詰められ、地下1階に向けて途中で90度右に曲がるのだが、その壁面は旋回する自動車の端部の軌跡に合わせて外側に膨らんでいる。スロープの終点の床の排水溝の蓋や腰壁も美しくデザインされている。時折車が通過するだけ

の、ほとんど誰も気づかない場所である。

これとは別に、玄関ホール下階の廊下と後述する大ホールの前室とを繋ぐ小さな部屋の、薄い鉄板を折り曲げて造られた階段も見どころである。軽やかで極めて美しいものであるが、これがスタッフ用の「裏動線」に当たる部屋の階段であることを知れば、誰もが驚きの声を上げることだろう。

■西側玄関から地階へ

輸出繊維会館には、心齋橋筋に面した西側にも玄関がある。中地階にある大ホールや会議室に直接アプローチするためのものである。まず玄関ポーチが人目を惹く〔図⑩〕。細い鉄製の柱にアルミ製の傘のような軽い屋根を載せたデザインで、モダンさと軽快さが共存する。屋根を支える柱は、丸い断面の鋼管を半分に切って背中同士で溶接した特殊なもので、Y字のように上部で開いている。これもル・コルビュジェの影響が感じられるデザインである。

この玄関から内部に入ると、南東の玄関ホールとは全く異なる空間が展開する。ウォールナット製の濃い茶色のベニヤ板が水平方向に貼り巡らされた、モダンだが落ち着いた空間が来場者を地下空間へと導く。階段の手摺は真鍮製の薄いもので、柔らかい曲線を描きながら階段に沿って降りて行く。

階段は一旦、中地階で止まるが、その下の地下1階にさらに続いていく。その階段は必要以上に壁が右側に湾曲している。そして地下1階にたどり着く直前で、天井が弧を描いて高さがぐっと小さくなる。こうした演出のせいで、階段を下りる際、上下左右に揺さぶられながら降りて行くような感覚を覚える。行き着いた地下1階には、明るいベニヤ板が貼られた「特別食堂」と「職員食堂」が並び、階段とはまた雰囲気の異なる空間が迎えてくれる。

中地階に戻ろう。西側階段から降りた右手には、ホール前の「ロビー」がある〔図⑪〕。ここでも壁にはウォールナットのベニヤ板が水平方向に張り巡らされ、柱型は滑らかな曲線を描く壁面で覆われており、やや暗いが柔らかい印象を与える。天井には、花卉をモチーフにしたような浅い彫り込みの中に電燈が配され、床には村野がデザインした、細い脚で支えられた軽やかな椅子やテーブル、衝立が並んでいる。いずれも村野らしい繊細なデザインだ。

一方、ホールに入ると、明るい色の塩地のベニヤ板が縦向きに張り巡らされた、雰囲気異なる空間が広がる。ホールの天井は和風の格天井を思わせるグリッドのデザインだが、スケールが大きいため、和風になり過ぎず、

モダンに見える。

このホールの南側に位置する「前室」もまた見どころが多い〔図⑫〕。この部屋もホールと同様、明るい色の木のベニヤ板が、縦向きに張り巡らされている。天井には村野が好んだFRPを使った蓮の実のようなデザインの電燈が設置されている。西側の壁面には、小さなキッチンが設けられているが、その配膳台の天板は、三日月型の曲線を持つもので、かわいらしい。

この「前室」の東側の壁面には、画家の堂本印象が原画を制作し、龍村商工で制作された絹製綿製の巨大なタペストリーが飾られている。これも「輸出」にちなんでいるのか、太平洋を中心とした世界地図が描かれ、その中央に船と虹が描かれている。堂本印象美術館にはこの原画も残されており、「船と虹」というタイトルが付されている〔註7〕。希望が感じられる明るい色彩が印象的である。

この「前室」にも村野がデザインした多数の椅子やテーブル、衝立が並べられている。椅子は先の「ロビー」とは異なり、低く重厚な椅子やソファが目立つ。その脚は小さく、地面から10cm程度だけ椅子を浮か上らせて軽さが演出されている。衝立も独自のもので、スチールと木を組み合わせた骨組みに籐を編んだ装飾を施し、布で覆うというものである。これ見よがしではない和風が心地よい。

「前室」の南側には、大小4つの「会議室」が並ぶ。これらの部屋も、木のベニヤ板を縦向きに貼り巡らされているが、小さい3つの会議室では、天井から花をモチーフとしたペンダントライトが下がり、大きなテーブルからし色の生地が貼られた丸い背もたれの椅子が並んでいる。しかし大きな会議室は、天井からは古風なシャンデリアが下がり、椅子には淡いピンク色の生地が貼られて、桜を想起させるものとなっている〔図⑬〕。モダンで柔らかい雰囲気の部屋と古風で装飾的な家具類が共存しているのが面白い。

会議室のもう一つの見どころは、ドアハンドルである。いずれも真鍮製のフレームや支柱で支えられているが、「前室」側は手になじむ丸みを帯びたアクリル板による押手、「会議室」側は持ち手が棒状のアクリル製の引手となっている。動作や持ちやすさから導かれた機能的な形態や、アクリルと真鍮という独自の材料の組み合わせなどに、村野の独自性が感じられる〔註8〕。

■おわりに

輸出繊維会館が竣工した1960年前後の村野の作品を見ると、1958年に新ダイビルや新歌舞伎座、1959年に横浜市庁舎、1962年に早稲

田大学文学部校舎や尼崎市庁舎、そして1963年に日本生命日比谷ビル（日生劇場）が竣工している。新ダイビルや横浜市庁舎、早稲田大学文学部校舎は、比較的シンプルなモダニズムの骨格を持つ建物である。一方、日本生命日比谷ビルは、隅から隅まで贅を尽くした建物であり、歴史様式や村野の晩年に特有の自由なデザインに支えられている。

こうして見ると輸出繊維会館は、1950年代のモダニズムから1960年代の、あるいは晩年の村野の円熟した作品へと移行する間の結節点となる作品だと言えそう。当時はまだ右肩上がりの発展が続いていた繊維産業の潤沢な資金があったからこそ、見事な作品が実現したと思われるが、村野の経歴の中でも重要な位置を占めるものとも言える。

以上、細部にまでわたって輸出繊維会館の特徴を紹介してきた。一つの建物の中に、「村野流」で統一されながらも雰囲気やデザインが少しずつ異なる部屋が並び、デザインに両義性があるなど、輸出繊維会館は総じて見どころが多く、それゆえ鑑賞する人に数多くの楽しさを与えてくれる。建物が永く使われ、建築の楽しさを人々に伝える存在であり続けて欲しいと願っている。

謝辞：本稿の執筆にあたり、株式会社輸出繊維会館の古田彰氏、京都府立堂本印象美術館の山田由希代氏、また京都工芸繊維大学美術工芸資料館にご協力いただきました。ここに記して、感謝いたします。なお、内装を含めた建物自体が大きな一つの作品となっている京都府立堂本印象美術館（京都市北区）では、文化勲章受章者の堂本印象画伯の多くの作品が鑑賞できます。

■註

〔註1〕「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」(OPEN HOUSE OSAKA)では、2014年から筆者が、輸出繊維会館の建築ツアーのガイドや解説を担当している。

〔註2〕『株式会社輸出繊維会館抄史：1958-1992』、株式会社輸出繊維会館、1992年

〔註3〕〔註2〕に同じ

〔註4〕「壁面モザイク（小下絵）大阪繊維会館」（20979）所蔵：京都府立堂本印象美術館

〔註5〕輸出繊維会館の手摺については、笠原一人：ナビゲーター「触覚デザイン02：村野藤吾の階段手すり」、『LIXIL eye』No.17、2018年10月、を参照。

〔註6〕村野藤吾『建築をつくる者の心』、ブレンセンター、1981年

〔註7〕「船と虹（小下絵）大阪繊維会館」（20978）所蔵：京都府立堂本印象美術館

〔註8〕輸出繊維会館のドアハンドルについては、笠原一人：ナビゲーター「触覚デザイン01：村野藤吾のドアハンドル」、『LIXIL eye』No.16、2018年6月、を参照。